

(ちょっと野暮ったい文章で恐縮ですが、書いてみます。)

## 自分の食に責任をもつこと

2009/8/2 たべつむぎ

自分の食に責任をもつことは、自分の生き方に責任をもつための重要な条件、だと思っています。

食べることは、生きることです。

この食べることを人任せにしすぎるのは非常にマズい。なんだか“私”という存在をカタチづくる枠線の一部が、にじんで消え入りそうな気がしてくるのです。

いや正確に言えば、「食べることを人任せにしすぎる」ことがマズいのではなく、人任せにしすぎて自分の食に責任をもてなくなってしまうことがマズい、と言うべきかもしれません。

自分が食べているものが、どこで栽培され、飼育されたものか知っている。どうやって調理されたのか知っている。または、そこまではわからないけど、顔の見える人に任せている。情報をしっかり開示する信頼のおける企業を選んでは任せている(これはここでいう「人任せ」ではない)。

これができずに、ただ受身の消費者として食品を食べさせられているのでは、食は完全に私から切り離され、そして“私”自身もそこから外へ流れだすのです。(このことは食だけに限りませんが。)

これに関して一つ思い出すのは、中国のギョウザ事件です。あのニュースが流れて、それに怒る人々に僕は同調できませんでした。

彼らは本来なら、「まあそんなもんだらうね」とうなずくか、または、肩を落として呆然とすべきだったのです。

自分の食を人任せにしてしまった、という自覚がないからこそ、「怒る」ことになってしまうのだと思います。他人に責任を投げ出してしまっている恐ろしさを感じました。

僕は以前、数年の間、県外のパン屋で働いていました。自分が手を動かして食べものを作る、そして、それを人に食べてもらえる。この両方に大きな喜びを感じて仕事をしていました。その喜びを知っているからこそ、今も「たべつむぎ」として食に関わっていきたいという気持ちがあるのです。

さて、パン屋でひたすらパンを作っている一方で、僕自身が毎日食べるものは近所のディスカウントストアで買ってきたものでした。安くておいしそうなのを食べてました。

しかし、ある時期に仕事と生活のバランスが乱れ、体調を崩してしまったことがありました。そのときポツリと疑問が湧いたのです。

「僕は誰のために食べものを作っているんだ？そして、僕は誰が作ったものを食べさせられてるんだ？」

そして僕自身と同じくして、パンを食べるお客さんの多くも、それを僕がどういう工程で、僕がどういう材料を入れて作っているかは、やはり知らないままなのです。

また、たとえお客さんにパンの材料のことを尋ねられたとしても、僕はその材料、例えば小麦に関していったい何を知っているのか。ただ製粉業者さんから卸してもらった小麦を、「心配なく食べられます」と答えてよいのか。ここら辺りが気になってました。

2007年にパン屋をやめた後、僕はしばらく北海道のある農家さん、養鶏家さんのお宅に住み込んで手伝っていましたが、こうして農業に目が向いて行動してきたのは、すごく自然な成り行きであったと思います。

そして今、ここ佐世保の片隅で、できるかぎり自分の食に責任をもつ覚悟をもって生活を始めました。

借りた畑を大雑把ながらも(苦笑)少しずつ耕していること。ニワトリを数匹飼い、卵を採り、ときとして鶏肉としてさばいていること。、必ず顔を知っている人から米や味噌を購入していること。自炊を心掛けていること。

それらのことがずっと続けられるかは、実際のところ、わかりません。しかしそれよりも、これらの経験を通じて食に関して多くのことを知ろうとしてきた姿勢こそが僕にとって大切です。

こうしたことが僕にとって、食生活に留まらずに、自分の生き方そのものに対しての自信になっている感覚、そして、“私”という存在をカタチづくる枠線を少しずつ濃くしている気がします。

カロリーが、ビタミンが、、といった栄養学的な食の充足不足が私たちの体に影響を与えていること以上に、「自分

の食に関してどれだけ責任をもっているか」が、存在としての“私”に影響を与えていることを、しっかりと見据え、考えておきたいのです。

僕の言う「自分の食に責任をもつことは、自分の生き方に責任をもつための重要な条件」というのはそういうことです。

そういう意味で、現在の日本の食が歩んでいる方向に不安を感じています。

おわり           （ たべつむぎ ホームページ <http://tabetsumugi.net>    メール [letter@tabetsumugi.net](mailto:letter@tabetsumugi.net) ）